

接続機能語「とたん」(途端)の 連語形式における時間的間隔の長短比較

—「V—たトタン」 < 「V—たトタンに」 < 「～。そのトタン」
< 「～。トタンに」 < 「～。そのトタンに」—

安部清哉
三次佑果

論文要旨

本稿で考察するのは、時間的な短さを表して使用される「とたん(途端)」の用法のうち、次のような、副詞的用法、接続助詞的複合辞用法、また接続詞的用法の5つのボタンについての、時間的間隔という意味部分に特化して比較した場合における、相互間の相対的長短の階層差である。アンケート調査による結果(現代若年層、およそ20歳台)、おおよそ次のように、比較的明確な長短の差が認識されていることを確認することができた。この5形式すべてにおける意味的な相違を、時間的間隔に限定してではあるが、話者の内省という点から初めて実証的に明確にしたものである。

時間的間隔				
短 ←		→ 長		
V—たトタン、	V—たトタンに、	～。そのトタン、	～。トタンに、	～。そのトタンに、

キーワード【連語、接続機能語、「とたん」(途端)、時間表現、複合辞】

1 はじめに

本稿で考察してみようとするのは、時間的な短さを表す「とたん」(途端)(以下、トタンとも表記する)の用法のうち、副詞的用法、接続助詞的複合辞的用法、また接続詞的ともとれるいくつかの用法に関する意味的差異の問題である。

トタンの連語表現における諸形式を、トタンの前文(前件)とその後の後件での出来事との間における時間的間隔という意味部分に特化して比較して見た場合における、相互間の相対的時間的間隔の長短の差異を考えてみようとするものである。より簡略に言えば、どのトタンの表現形式での用法が、時間的により短い状況を表現するか、どの形式が時間的により長い状況を表現して使われるか、という問題である。

さて、「途端」は、辞書的には名詞として扱われるが主格になる用法はほぼなく、副詞としての機能（「～とたん（に）～」）、さらに、接続助詞的複合辞的な用法（「～した（その）とたん（に）、～」）、副詞的用法に含まれると言えようがほとんど接続詞的ともみなせるような用法（「～。そのとたん」）などを持つ。

従来の研究では、語史的な通時の研究をひとまず別とすると、上記の複数の形式を特に区別することなくトタン1つの用法として扱われることが多い（その中で、飛田・浅田（1994）ではいくつかのバタンを区別して扱っている）。その上で、意味的に類似する他の機能語（「やいなや」「なり」「瞬間」など）と比較することがほとんどであった。それらは、主に語彙研究の類義語研究という視点、あるいは、文法研究の一環として副詞（副用語）の研究や接続助詞的機能の研究としての視点、またその場合でも、他の類似機能語との比較が中心であった。具体的には、「～した瞬間」「～するやいなや」「～するなり」「～したなり」「～と同時に」「～そばから」などとの比較や、「直ちに」「急に」「にわか」などとの比較が主要な研究であった。

われわれは、これらと同様のいわゆる類義語との比較研究を試みた過程で三次（2016a、2016b）、安部（2017 予定稿）、従来の研究におけるトタンの扱いや考察の方法に、後述のような、いくつかの問題があることを感じた（例えば、トタンの各表現形式の相違が区別なく論じられていること、トタン（の諸表現形式）と類義語との相違が同一例文（作例など）での置き直しの可否で主に論じられていること、それに加えてトタンと類義語との用法の相違とそれぞれの実例毎に微妙に異なる意味的相違とが渾然と論じられていること、等）。

上でトタンの諸表現形式、と言ったのは、例えば次のような形式である。（なお、「～」部分は何らかの文脈があることを表す。）

- ① 「～、とたんに～。」、「～、そのとたん（に）～。」——副詞的用法（例、「目が覚めたら、（その）とたんにお腹がグーと鳴った。」、ここでは、直前の下線部分がトタンへの連体修飾語句でなく、いわゆる単なる従属節の場合）（「に」が下接するとよりはっきりとした副詞的な用法となる。）
- ② 「～。そのとたん、」、「～。そのとたんに、」——接続詞的用法（といま仮称する）【注1】
- ③ 「～したとたん（に）、」、「～したそのとたん（に）、」——接続助詞的用法（といま仮称する）（「～した」の部分はいわゆる連体修飾語句とみなせる部分を表す）

*上記①②③は仮の分類である。主に、その構文上の位置と構文的機能からの分類である。

すなわち、形態としては、連語形式「とたんに」「そのとたん」「そのとたんに」のいずれかの形態を取って（これらいずれかの形態でなら）使用可能となっているものである。

また、「その」や「に」が付かない単独の「とたん」も、一定の連語的構文（仮称）であ

る「連体修飾語(句)(～した)+とたん(、)～」【従属節】に限るなら、使用可能であるので、この単独の「とたん」の使用は、この連語的構文において実現可能であることがわかる。

④ 「連体修飾語(句)(～した)+とたん(、)」【従属節】、(⇒～【主節】へ続く)

なお、「。とたん～」での単独用法は口語・俗語としてはあるようである。本稿ではひとまず考察の対象から除いた。

念のために付言すれば、単独の「とたん」だけでなく、前述の連語形式「とたんに」「そのとたん」「そのとたんに」は、この「連体修飾語(語)を伴った連語構文」においても使用可能である(上記③に該当する)。まとめて言い換えるなら、次のようになる。

- 名詞「とたん」は、単独では、主語にならず、通常、単独では副詞的にも使用されない。(単独で使用される場合は、連体修飾語(語)ないし指示詞「その」などが付いて使用される。)
- 使用される場合は、連語的形式や、一定の連語的構文に限定されており、その形式を把握しておく必要がある。即ち、諸連語形式=とたんに、そのとたん、そのとたんに、「連体修飾語句+(その)とたん(に)、」など。
- つまり、「とたん」の語法・用法は、これらの連語的形式で考えていく必要がある。
- さらに、一見単独の用法にみえる「～したとたん」の語法の事例も、それらの連語形式(すなわち「(～した)(。)(その)トタン(に～)(、)」)、および、一定の構文的形式をもつ語法としてとらえなおし、その構文の中での意味・用法をもつ連語として、考察していく必要があることがわかる。(それらの諸形式は、連語形式の問題だけでなく、意味的に似たように見えるその他の語(「瞬間」「矢先」「拍子」など)における各連語形式においても、微妙な相違が伴っている、という問題でもある。(安部(2017予定稿、鈴木泰先生記念論集)参照)

【注1】 指示詞「その」が上接し、文頭にある場合は、接続詞的な用法とも位置付けられる(「に」が下接した場合でも)。それは、指示詞起源の接続詞が多いことを見ても——「そして」「それから」「それでも」「しかし」「しかるに」「こうして」など——、「その」による前文脈への指示性と、文頭において(時間的)前文と後文との文脈的接続関係を表している機能とに起因するものであろう。1連語(「。その途端(に)」など)として見ると、構文的な位置と機能上、ほぼ「接続詞相当」(≡「そして」「そしたら」など)とみなし得るように思われる。

2 トタンの意味・用法の比較方法における課題

そのような課題の1つとして、従来の研究では、上記のようなトタンの諸形式がほとんど区別されずに、他の形式と比較されていることがあげられる（以下、上記のようなトタンを含む用法、表現形式（パタン）を単に形式と呼ぶことにする）。トタンと他の類義語との比較については、安部（2017）、三次（2016a）・三次（2016b）があるが、その考察の過程で見出されたのは、トタンの諸形式の間には、まず時間的間隔における長短の相違が存在していること、また、時間的間隔以外にも前後の文脈的な関係を表す意味的な相違があり、その形式によって明確な相違が存在していること（この後者の点の一部の先行研究でも指摘するところがある）、などである。このうち、トタンの諸形式での意味的な相違の問題は、それらの形式相互の比較によってまず十分に考察する必要がある。また、他の類義語表現との比較においても、トタンの諸形式を区別せず混在させて論じることが少なくないが、実際には、時間的間隔以外の文脈の意味での相違も存在しており、形式を区別して扱う必要がある。

例えば、次の例文1では、前件と後件との間にはほとんど時間差がなく、ほぼ「同時」とも言えそうな一瞬の出来事である。（トタンの部分にトタンの他の諸形式、あるいは、「瞬間」などを入れて比較してみたい。）

例文1 水滴は熱したフライパンに落ちたトタン、ジュッと音を立て一瞬で蒸発した。

ところが、次の例文2では前件の「開く」という前件の事態は開始され、かつ、その一部は完了しているともみなし得て（既に少しは隙間が開いている）、「その後（隙間ができてから）」に後件事態が発生している。

例文2 ドアを開けたトタン、猫が飛び出してきた。

上の例文1よりも前件と後件との時間的間隔は広くなり、前件が起こってから後件が始動するという継起的な連続現象を表しているという印象が強くなる。

さらに次の例文3のような場合になると、後件の事態が出現するまでには、実際には数週間、あるいは、数ヶ月の時間があつたとしても、決して不自然な用例ではないだろう。

例文3 有名になったトタン、彼は横柄な態度をとるようになった。

これらはほんの一例であるが、文脈によってかなり時間的な幅が許容される語であることがわかる。つまり、他の類語表現と比較する時も、どのような時間幅をもった表現で比較するのかによって比較内容や、トタンの例自体の許容範囲などが変化してくることが予想される。（多様な文脈の例文で比較されるのがより妥当であると思われるが、実際には、1、2例の例文での比較や、複数の例文であっても時間的な幅という点ではほとんど似たような例文が取り上げられてしまっているということが少なくないのである。——今回のアンケート

調査では、添付したように、そのような問題を考慮して、意味的時間幅が異なる7つの複数の例文で比較している。

そのような問題以外にも、例えば、以下の点なども、従来の比較方法における問題(課題)として指摘し得る。

- ア、トタンの諸形式ごとの相違が十分配慮されておらず、異なる諸形式もすべて同じトタンの用法とされていることが少なくない。
- イ、トタンの意味には、時間的長短の問題と文脈的關係性の有無の問題との両方が、諸形式ごとにあるが、他の類義表現との比較において、どのような意味・用法(時間的間隔か文脈の意味か、接続など他の点か)を比較しているのかが、時に曖昧である。
- ウ、他の類義表現との比較において、比較語形の単純な置換(置き直し)による比較のみに分析が終始してしまう。
- エ、作例のみ、あるいは、作例による比較が主になってしまうことによる分析の偏りが時に無自覚に生じてしまう。

例えば、エとした作例に偏った考察による誤謬という点は、トタンに限らず、よく指摘される問題点である。その例文が実生活でも使えそうに(言えそうに)思われ、文法的な間違いも特に指摘できず、違和感もほとんど指摘できないものの、一方、実例ではほぼお目にかかれぬか、実例のもつ微妙な意味的特徴や文脈的特性を伴っていない作例は少なくない。一般的な母語話者が誤用であると感ぜない以上、「間違った日本語」とは認定できないが、一方、研究上、それを意味・用法の比較材料として重要視するのは回避しておくのが理想的なのではないか、と考える。(一定の条件下や、誤謬の生じる危険性を理解した上で利用するなどの考慮があれば、利用価値はあるだろうが。)

本研究ではそのような諸点を配慮し、トタンの連語的表現パタンの違いによって、時間的間隔は相違するか、という点を、母語話者へのアンケート調査を試みることによって、まずは実態を把握することに主眼を置いて調査してみたい。辞書やコーパス等の用例によつての内省的分析は必要であろうが、それだけでは執筆者の内省による分析に偏ってしまい、実際の集団としてみた総体的母語話者の認識・意識が見えてこなくなる可能性がある。アンケート調査を実施することで、より実態に即した結果を得ることができると考えてみたわけである。

3 アンケートによる比較調査とその方法について

上記のような問題を踏まえ、本稿では、「その」「に」の有無による相違と、接続の相違による次の 8 つの形式を対象とした比較を、まず考えた。次に示したのは、それらを「に」の有無による 2 対ずつで示したものである。

「～. そのとたん」「～. そのとたんに」

「。とたん」、「。とたんに」

「V—たとたん」「V—たとたんに」(V は動詞)

「V—たそのとたん」「V—たそのとたんに」

このうち、下線を付した 3 形式は、実例が皆無ではないが、それぞれ用例が非常に乏しい形式であった。特に「。とたん」は、執筆者 2 名の内省でも現代語としては使われないものと考えられた。そこでこれら 3 形式は、今回の比較調査から削除した(実例ほか詳しくは別稿・三次(2016a・2016b)にて紹介する)。

残った 5 つの形式について、2 対ずつ組み合わせ、まったく同じ 7 つの例文について、どちらの形式での例文の方が、時間的に短く感じられるかを二者択一式で選択してもらった。5 形式から 2 対ずつの組み合わせなので合計 10 組での比較となる。例文を選ぶにあたっては、意味的にトタン形式の前後での時間的間隔の幅に多少ばらつきとバリエーションが出るように選択してみた。また、余り長い例文は短時間で判断してもらおうアンケート形式には向かないので、1～2 行で内容が明瞭に理解できる文であることを優先させた。また、第 2 調査票では、各対ごとの例文 7 組のあと、その「(◆このペアでは、()の方が短く感じる) ← A、B いずれかを入れて下さい。」と記して、7 組全体的に見て、どちらの形式が短いとみなせるかを回答者に選択してもらおう質問を設けた。これは、7 組個々での選択としては内容の相違によって時間的長短の判断にユレがあっても、全体としてはどのように受け取っているかを確認するための質問である。個々の例での選択が拮抗していても形式としての総合的判断が可能な場合もあるであろう(第 2 調査票のみで付したので今回の集計では参考に留めた)。また、選択が 1 形式に偏る傾向があった場合でも総合的な判断を確認するためであった。そのアンケート調査票は本論最後に掲載しておいた。なお、アンケート票は、一度の時間に行う回答者の負担(内省しながら比較する集中可能時間)を考慮し、形式の組み合わせを変えた 2 種類作成し、それぞれ異なる回答者に行っている。5 形式から 2 対ずつの組み合わせなので全部で 10 対の比較になり、対ごとに例文を 7 組用意したため、10 対を一度に調査しようとする 70 例文を読む必要があることになる。極めて類似するトタンの形式を比較するために、共通例文である 7 組を何度も読むことになると、10 対 70 例文の比較で

は意識を集中させ続けるのは容易ではないと考えた。そこで、任意の5対ごと35例文でアンケート票を2種類作成して異なる話者集団に対して別々に行うこととした（後掲参照）。

分析対象は学習院大学文学部1～4年生、大学院生である。アンケート形式での調査票を用いて、2015年10月・11月に調査を行った。第1調査票と第2調査票での回答者は異なる。

時間的長短を判断してもらう例文は、2種のトタン形式ごとに対とし（1つの調査票で5対、合計10対）、7組の例文ごとに、2種のトタン形式での例文をA・Bとして提示した。10対とも、各対での例文は、前件・後件の内容すべて同じである。7組の例文は主にグループ・ジャマシイ（1998）での用例をもとに作例した。各トタンの表現形式ごとに、A・Bの例文1組ごとを順に比較してもらい、前件と後件の時間的間隔が「狭い」方を選んで、A・Bの記号に○印をつけてもらった。7組での○印が一定基準以上上回ったトタン形式の方を、その比較における時間的間隔の「狭い」（短い）表現と判断した。一定基準以上というのは、A・Bいずれかの選択回答が7組中5つ以上（5～7例）同じ形式を選択した時は明瞭な差がある回答と判断し、4：3のようにA・Bの数が拮抗した場合は、使い分けがかなり微妙なものとして「半々（五分五分）」と解釈した。

なお、回答者数は、第1調査票は44名、第2調査票47名である。回答の不備（話者情報欄での無記名など情報不足と判断されたもの、回答欄でも部分的にしか回答がないもの等）や外国人の回答は含めていない。

なお、今回の例文では、「トタン」あるいは「トタンニ」の後はすべて読点を入れるかたちで統一することにした。読点のない形式も考えられたが、各形式を明確に（視覚的に）認識してもらいやすいだろうことを考えたからであった。しかし、調査後に、コメント欄での複数の意見を参考にすると、読点のない形式の場合にはおそらく前件後件の間での切迫感が増すように感じられると考えられる。それゆえ、読点の無い例文にした場合には、ある場合と比較すると時間的に短いと判断されるかもしれない（なお、歴史的研究ではあるが、田島（2001）では句読点の有無の相違について言及がある）。

4 調査結果と考察

調査結果は、以下の表1・表2の通りである。ivの対以外では、比較的明瞭な差が見られた。うすいグレー背景の部分時間が時間的間隔が「短かい」として多く選ばれた形式とその数値である。

上記の結果とその解釈の1例を示してみる。

これら10の対における比較質問では、ivの1対を除いた9対において（ivでは43%と30%と27%で差が大きくない）、ABの一方が他方に対して37%（vii）以上の差を付けて選択されていた（表1・表2の色付背景部分が短かいとして撰択された形式とその回答数、後

表 1 第 1 調査票の回答結果 (44 名)

			回答数 (%)			差異の要素 短時間性	AB の % 差と差異 要素との関係
			A	半々 (4/3)	B		
第 1 調査票 (44 名)	i	A V - た とたん、	26 (59%)	13 (30%)	5 (11%)	「に」無し	差が約 5 割
		B V - た とたんに、					
	ii	A ~。そ のとたん、	28 (64%)	7 (16%)	9 (20%)	「に」無し 逆要因「その」無 し	相反する要素あ り。差異 40% 台
		B ~。と たんに、					
	iii	A ~。と たんに、	4 (9%)	6 (14%)	34 (77%)	接続助詞	差が 60% 台
		B V - た とたんに、					
	iv	A ~。そ のとたんに、	13 (30%)	12 (27%)	19 (43%)	「その」無し	AB 間の差が小さ く、「半々」も 27% と多い。
		B ~。と たんに、					
	v	A ~。そ のとたんに、	2 (5%)	5 (11%)	37 (84%)	接続助詞・「に」 無し・「その」無し	差が 80% 程と大 きい
		B V - た とたん、					

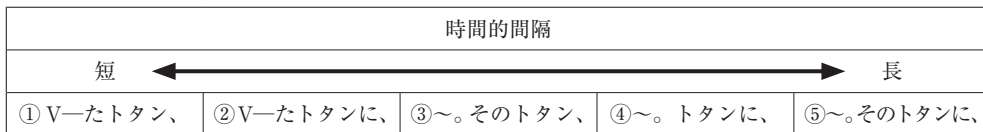
表 2 第 2 調査票の回答結果 (47 名)

			回答数 (%)			差異の要素 短時間性	AB の % 差と差異 要素との関係
			A	半々 (4/3)	B		
第 2 調査票 (47 名)	vi	A V - た とたん、	39 (83%)	7 (15%)	1 (2%)	接続助詞・「に」 無し	差が 80% 程と大 きい
		B ~。と たんに、					
	vii	A ~。そ のとたん、	11 (23%)	8 (17%)	28 (60%)	逆要因「に」無し 接続助詞・「その」 無し	相反する要素あ り。差異 30% 台
		B V - た とたんに、					
	viii	A ~。そ のとたん、	34 (72%)	8 (17%)	5 (11%)	「に」無し	差が 60% 台
		B ~。そ のとたんに、					
	ix	A ~。そ のとたんに、	5 (11%)	5 (11%)	37 (78%)	接続助詞・「その」 無し	差が 60% 台
		B V - た とたんに、					
	x	A ~。そ のとたん、	7 (15%)	5 (11%)	35 (74%)	接続助詞・「その」 無し	差が 60% 台
		B V - た とたん、					

述参照)。それらでは明瞭な差が認識されていると解釈される(このAとBの%の差異を時間的長短差と見なして配列したのが図2である)。

一方、最も差が小さかったのが、ivの「～.そのとたんに」(30%)と「～.とたんに」(43%)であった(この13%の差を差異「13%」として図2に記載)。この比較では、4対3の選択であった「半々」(「半々」には逆の3対4も含む)としたものでも27%もあってほぼ3分状態とも言える。このような拮抗状態のものは、この1対だけであったので、他の形式との比較をひとまず行ってみるため、一番多かったB(43%)の「～.とたんに」の方を「狭い」(短い)と仮に見なすこととして、5つの形式での時間的長短の回答を相互比較してみた。その結果を図に配置したのが、以下に再掲載する図1及び図2である。次に、結果の比較とその解釈を簡略に述べておく。

図1



- まず、「～.そのとたんに」はどの形式と組み合わせても、時間の短さで選ばれることはなかった。したがって「～.そのとたんに」が5つの形式の中では最も長い時間幅を持つ、と解釈された(表1における右端の⑤「～.そのとたんに」の位置)。
- 一方、どの形式との組み合わせでも短い方として選ばれたのは、「V—たとたん」であったので、この形式が、最も時間幅が短いと解釈された。その理由を、このアンケート調査だけから説明することは出来ないが、語構成から解釈してみるならば、前件での動詞をそのまま直接トタンで受け、次いで、「に」を受けることによる論理的切れ目も持たず、トタンから直接次の表現に展開するため、場面の展開が早く感じられることで、時間幅が短い印象を与える、ということなのかもしれない。
- 5形式を比較した10対の中で、ABの選択に最も大きな差が現われたのが、vi番のA「V—たとたん」(83%)とB「～.とたんに」(2%)の差異81%であった。この2形式の形態的な違いに着目すると、トタンが直接前件を受けるか句点で一旦切れているか否か、格助詞ニを後件との間に挟んで格表示による論理性を一旦意識させる(?)展開になっているか否か、などが、時間的な長短に影響している可能性を示唆している。
- 次いで差が大きかったのが、v番のA「～.そのとたんに」(5%)とB「V—たとたん」(84%、差異79%)であった。この2語も、「に」の有無、トタンの直前での句点での切れの有無の相違が上記の対と同様にあるから、やはり上記の解釈のように、この2点は、時間的長短に影響している要因と見なすことができそうである。さらに、この対では「その」の有無もあり、その影響も関わっている可能性を示唆している。

○上記2形式「V—たとたん」「～。そのとたんに」を両極として位置付けつつ、上のような特徴を考慮すると、時間的長短の決定要素に関わっている要素として、表1・表2の%部分の右側の諸点(以下のI、II、III)を指摘することができる。それらの特徴から見て、影響の大きい要素は、順に以下の特徴と考えられる。

- I 「句点で切られるか、接続機能複合辞用法か」(図1の①②と③④⑤とでの差異)
- II 「に」の有無(同じく図1の、①③と②④⑤とでの差異)
- III 「その」の有無(同じく図1の、①②④と③⑤とでの差異)

これらの相違から5つの形式での時間的長短の差異を解釈したのが、図1であった。

さらに、②③④間の形式の階層性がより明瞭になるように、作図してみたのが図2である。この図2では、各比較質問でのABの回答数の%の差異(図2中の%の数字。例えば、表1で形式の①と②を比べたiの回答のAB間の%の差(A59% - B11% =) 48%を示すと、各形式間の意味的な長短の距離とを関連づけて視覚的にわかりやすいように工夫して示してみた。

○i ~ xの対比比較の結果においては、%の大小と形式間の時間的長短の差異との間に大きな矛盾はなく、各形式と%との間に相関関係が認められる。(*比較した形式AとBの回答における%の差、すなわち、図2の%数が大きいほど、意味的な面での時間的間隔の長短差が大きいと見なせる。)

図2を少し解説しておく。ivでの形式④と⑤の回答%の差13%を別とすれば、以下のように、各形式間の時間的長短間隔に対する回答者の感覚には、①~④(⑤)の形式間に、一定の(均等な)段階的相違があると考えられよう。iの①②間、iiの③④間、viiの②③間の回答のABの%の差は各々48、44、37%差でおよそ40%台の差でほぼ近似である。同様に、iiiの②—④間、viiiの③—⑤間、xの①—③間は各68、61、59%差でほぼ60%台の差で横並びである。同様に、これがvの①——⑤間、viの①——④間では79、81%差でほぼ80%の差(⑤が含まれるixの②——⑤間はやや少なくなり67%差)となっている。つまり、各形式間での差は40%前後(隣接形式間)、60%台(2形式分の隔たりの場合)、80%程(3~4形式分の隔たり)となっていて、時間の長短間隔の隔たりには、①~⑤の各形式間に一定の均等な相違感(あくまで回答総体における均質性であるが)が認められる。

このような明瞭な相関性が現れてきていることは(矛盾や乱れがほほない点に)、今回のアンケート調査法の有効性および例文の適切性を投影していると考えられる。なお、右端に記載したように、④⑤の形式での相違は小さい。

図2 「とたん」の連語形式の時間的間隔の階層

時間	時間的間隔					備考
	短 ←————→ 長					
連語形式	① V—たとたん	② V—たとたんに	③ ～.そのとたん	④ ～.とたんに	⑤ ≤～.そのとたんに (僅差)	④と⑤との間は 下記の点からも 総合的に僅差と みなせる。
i	48%					
ii			44%			
iii		68%				iiiとix 僅差
iv				13%		僅差
v	79%					vとvi 僅差
vi		81%				vとvi 僅差
vii		37%				
viii			61%			
ix		67%				iiiとix 僅差
x	59%					

回答者の%のABの差異を各形式間の距離と関連づけて図示した。%の大小と形式間の時間的長短の差異との間に相関関係が認められる。④⑤間の差が、殆どないもの(iiiとix比較、及び、vとvi比較)と差のあるもの(iiiとviii比較、及び、iv)とがある。

○図2の%部分の右側に記したが、興味深いもう1つの点は、上述のⅠ、Ⅱ、Ⅲの時間的長短の決定要素(弁別特性)の一部が他方にもあると、回答の%の差異が(片方にしかない場合よりも)小さくなる、という点である。iiにおける「に無し」と「その無し」(44%差)、また、viiにおける「接続機能」・「その無し」対「に無し」(37%差)の場合を、他の事例(iの48%)と比較参照されたい。各々の弁別特性が相殺し合っていると解釈できる。これらの弁別特性の有無と回答結果に相関性が確認できる点も興味深い。

以上が、調査結果の報告、および、分析してみた内容と総合的解釈である。

なお、追記すれば、5つの形式のこのような時間的階層性は、どのような認知的背景があって形成されているか、というもう一步踏み込んだ解釈が残されている。その点については、仮説的ではあるが次のような解釈を記しておくことにしたい。

全体的には「に」「その」、そして句点のある形式が、時間的間隔が長いという傾向を示すことから考えて、次のようなことが考慮される。トタンはやや文語的な語句であり、日常的な口頭語ではこんなに用いられにくいと思われる(使われたとしても、語り口調や何かの引用表現的口調という場合に偏るか)。文章語としてのトタンを目にするのはもっぱら文字表現の中ということになると、視覚的印象の影響も受けやすいことが考慮される。つまり、

視覚的な字面においても、文字数が多くなったり、あるいはまた、句点や読点などが挿入されることによって、視覚上の空間的にも、黙読・音読の時間的な間合いの上でも、より長い文字数・記号数を伴う表現形式の方が、時間的隔たりをより印象付ける効果を持っている、ということなのかもしれない。このことは、文章語における視覚の効果だけでなく、口頭語での発話の場合でも同様の影響を持つから、発話に時間がかかったり、(読点・句点に相当するような)発話上の間合いが入るほど、それらから受ける時間の隔たりの印象も長くなるということにもなる。「V—たとたん」という最も単純で短い形式が、最も短時間と感じさせている理由は、そのあたりに求めることができるかもしれない。

5 むすび

本稿では、トタンの連語的諸表現形式の5形式について、その意味の比較を、特に時間的間隔の長短という点に限定し、相互の相違を明らかにしてみようと考えた。2形式ごと対にして比較する方式で、母語話者(若年層、約40名強)に対するアンケート調査を行って比較した。今回のアンケートの結果からは、5形式での時間的間隔の相違には比較的明瞭な階層性が認められ、図1のような結論を得ることができた。また、本稿の調査について述べる過程で、従来の研究における問題点も指摘した。併せて、このような調査方法の有効性も示した。

なお、実際の使用は、個々人毎に(各回答に現れているように)相違やバラつきが多様であるが、本稿で図1、図2に示せたような「とたん」の階層性は、あくまでラング(20代の共時態での)としての階層モデルであると位置づけられよう。

トタンの5形式は、意味の上で、時間的間隔以外でも相違がある(安部(2017)、三次(2016a)・三次(2016b))。それらについては、他の類義語との比較も含め、継続して考察していきたい。

*以下に、第1調査票、第2調査票を掲載する。調査票と調査手順について、補足説明する。

- 第1調査票を作成して先に実施した後、形式を少し手直しした第2調査票を実施した。
- 第1調査票でABの対比ペアを当初の5組から直前に7組に増やしたため、6・7組目が通し番号でなく◇●▽■等の記号で急遽処理している。
- 第2調査票の群毎の末尾の質問は(「◆このペアでは」)、今回は参考程度とし、集計には反映させていない。

[第1調査票] (第2調査票の◆部分の質問は第1調査の時はまだ付けていない)

授業名 _____ 日付 _____ 氏名 _____ 学籍 NO _____

あなたの読書量は? = () <記号を回答 (○よく読む、□普通、▽少な目)>

以下の A、B どちらの方が、その前と後の出来事(前件、後件)の時間的間隔が「狭い」感じがしますか。あくまで、前件のこの後、後件が起こるまでの時間的間隔の短さ、長さというだけで考えて、短かい方の記号(AかB)に○を付けて下さい。

I 群

- (1) A ドアを開けたとたん、猫が飛び出してきた。
B ドアを開けたとたんに、猫が飛び出してきた。
- (2) A 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
B 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。
- (3) A 試験終了のベルが鳴ったとたん、教室が騒がしくなった。
B 試験終了のベルが鳴ったとたんに、教室が騒がしくなった。
- (4) A 注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。
B 注射をしたとたんに、患者のけいれんはおさまった。
- (5) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
- ◇ A 噂の二人が部屋から姿を現したとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
B 噂の二人が部屋から姿を現したとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
- A 空が暗くなったとたん、大粒の雨が降りだした。
B 空が暗くなったとたんに、大粒の雨が降りだした。

II 群

- (6) A ドアを開けた。そのとたん、猫が飛び出してきた。
B ドアを開けた。とたんに、猫が飛び出してきた。
- (7) A 有名になった。そのとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
B 有名になった。とたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。
- (8) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたん、教室が騒がしくなった。
B 試験終了のベルが鳴った。とたんに、教室が騒がしくなった。
- (9) A 注射をした。そのとたん、患者のけいれんはおさまった。
B 注射をした。とたんに、患者のけいれんはおさまった。
- (10) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。とたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
- ◆ A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
B 噂の二人が部屋から姿を現した。とたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
- ▲ A 空が暗くなった。そのとたん、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなった。とたんに、大粒の雨が降りだした。

Ⅲ群

(11) A ドアを開けた。とたんに、猫が飛び出してきた。

B ドアを開けたとたんに、猫が飛び出してきた。

(12) A 有名になった。とたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

B 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

(13) A 試験終了のベルが鳴った。とたんに、教室が騒がしくなった。

B 試験終了のベルが鳴ったとたんに、教室が騒がしくなった。

(14) A 注射をした。とたんに、患者のけいれんはおさまった。

B 注射をしたとたんに、患者のけいれんはおさまった。

(15) A 友だちと 30 分ほど話して、受話器を置いた。とたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

B 友だちと 30 分ほど話して、受話器を置いたとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

■ A 噂の二人が部屋から姿を現した。とたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

B 噂の二人が部屋から姿を現したとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

△ A 空が暗くなった。とたんに、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなったとたんに、大粒の雨が降りだした。

Ⅳ群

(16) A ドアを開けた。そのとたんに、猫が飛び出してきた。

B ドアを開けた。とたんに、猫が飛び出してきた。

(17) A 有名になった。そのとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

B 有名になった。とたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

(18) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたんに、教室が騒がしくなった。

B 試験終了のベルが鳴った。とたんに、教室が騒がしくなった。

(19) A 注射をした。そのとたんに、患者のけいれんはおさまった。

B 注射をした。とたんに、患者のけいれんはおさまった。

(20) A 友だちと 30 分ほど話して、受話器を置いた。そのとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

B 友だちと 30 分ほど話して、受話器を置いた。とたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

□ A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

B 噂の二人が部屋から姿を現した。とたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

▼ A 空が暗くなった。そのとたんに、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなった。とたんに、大粒の雨が降りだした。

Ⅴ群

(21) A ドアを開けた。そのとたんに、猫が飛び出してきた。

B ドアを開けたとたん、猫が飛び出してきた。

(22) A 有名になった。そのとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

B 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。

(23) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたんに、教室が騒がしくなった。

- B 試験終了のベルが鳴ったとたん、教室が騒がしくなった。
- (24) A 注射をした。そのとたんに、患者のけいれんはおさまった。
B 注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。
- (25) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
- A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
B 噂の二人が部屋から姿を現したとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
- ▽ A 空が暗くなった。そのとたんに、大粒の雨が降りだした。
B 空が暗くなったとたんに、大粒の雨が降りだした。

コメント

..... (第1調査票、以上)

〔第2調査票〕

アンケートにご協力のほど、お願いいたします。(安部・三次) 2015年11月7日

授業名 _____ (学会時) 日付 ____ 月 ____ 日 学年 _____ 氏名 _____ 学籍 No _____

あなたの読書量は? = () (記号を回答 (○よく読む、□普通、▽少ない))

以下のA、Bどちらの方が、その前と後の出来事(前件、後件)の時間的間隔が「狭い」感じますか。

- 1 前件の出来事の後、後件が起こるまでの時間的間隔の「短さ」という点について、短い方の記号(AかB)に○を付けて下さい。(どちらも同じ程度の場合は、両方を○で囲んで下さい)
- 2 各群ごとの終わりの◆に、その群全体として、A、Bどちらが時間的間隔が短いと感じるか、記載して下さい。

- I群 (1) A ドアを開けたとたん、猫が飛び出してきた。
B ドアを開けた。とたんに、猫が飛び出してきた。
- (2) A 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
B 有名になった。とたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。
- (3) A 試験終了のベルが鳴ったとたん、教室が騒がしくなった。
B 試験終了のベルが鳴った。とたんに、教室が騒がしくなった。
- (4) A 注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。
B 注射をした。とたんに、患者のけいれんはおさまった。
- (5) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。とたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
- (6) A 噂の二人が部屋から姿を現したとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

B 噂の二人が部屋から姿を現した。とたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

(7) A 空が暗くなったとたん、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなった。とたんに、大粒の雨が降りだした。

(◆このペアでは、()の方が短く感じる) ←A、Bいずれかを入れて下さい。

II群 (8) A ドアを開けた。そのとたん、猫が飛び出してきた。

B ドアを開けたとたんに、猫が飛び出してきた。

(9) A 有名になった。そのとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。

B 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

(10) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたん、教室が騒がしくなった。

B 試験終了のベルが鳴ったとたんに、教室が騒がしくなった。

(11) A 注射をした。そのとたん、患者のけいれんはおさまった。

B 注射をしたとたんに、患者のけいれんはおさまった。

(12) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたん、再び電話のベルが鳴り出した。

B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

(13) A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

B 噂の二人が部屋から姿を現したとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

(14) A 空が暗くなった。そのとたん、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなったとたんに、大粒の雨が降りだした。

(◆このペアでは、()の方が短く感じる)

III群 (15) A ドアを開けた。そのとたん、猫が飛び出してきた。

B ドアを開けた。そのとたんに、猫が飛び出してきた。

(16) A 有名になった。そのとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。

B 有名になった。そのとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

(17) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたん、教室が騒がしくなった。

B 試験終了のベルが鳴った。そのとたんに、教室が騒がしくなった。

(18) A 注射をした。そのとたん、患者のけいれんはおさまった。

B 注射をした。そのとたんに、患者のけいれんはおさまった。

(19) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたん、再び電話のベルが鳴り出した。

B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。

(20) A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

B 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

(21) A 空が暗くなった。そのとたん、大粒の雨が降りだした。

B 空が暗くなった。そのとたんに、大粒の雨が降りだした。

(◆このペアでは、()の方が短く感じる)

- IV群 (22) A ドアを開けた。そのとたんに、猫が飛び出してきた。
 B ドアを開けたとたんに、猫が飛び出してきた。
- (23) A 有名になった。そのとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。
 B 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。
- (24) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたんに、教室が騒がしくなった。
 B 試験終了のベルが鳴ったとたんに、教室が騒がしくなった。
- (25) A 注射をした。そのとたんに、患者のけいれんはおさまった。
 B 注射をしたとたんに、患者のけいれんはおさまった。
- (26) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
 B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたんに、再び電話のベルが鳴り出した。
- (27) A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
 B 噂の二人が部屋から姿を現したとたんに、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
- (28) A 空が暗くなった。そのとたんに、大粒の雨が降りだした。
 B 空が暗くなったとたんに、大粒の雨が降りだした。

(◆このペアでは、()の方が短く感じる)

- V群 (29) A ドアを開けた。そのとたん、猫が飛び出してきた。
 B ドアを開けたとたん、猫が飛び出してきた。
- (30) A 有名になった。そのとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
 B 有名になったとたん、彼は横柄な態度をとるようになった。
- (31) A 試験終了のベルが鳴った。そのとたん、教室が騒がしくなった。
 B 試験終了のベルが鳴ったとたん、教室が騒がしくなった。
- (32) A 注射をした。そのとたん、患者のけいれんはおさまった。
 B 注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。
- (33) A 友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
 B 友だちと30分ほど話して、受話器を置いたとたん、再び電話のベルが鳴り出した。
- (34) A 噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
 B 噂の二人が部屋から姿を現したとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。
- (35) A 空が暗くなった。そのとたん、大粒の雨が降りだした。
 B 空が暗くなったとたん、大粒の雨が降りだした。

(◆このペアでは、()の方が短く感じる)

コメント欄 ご意見を記載して下さい。

..... (第2調査票、以上)

【参考文献】

(以下は本論の用例と直接関わる文献のみであり、より詳しい先行研究は安部 (2017 予定稿) および指導院生の三次 (2016a)・(2016b) の参考文献を参照されたい。)

安部清哉 (2017 予定稿) 「類義連語表現の文型形式から見た構文の類型について——連語構文類型構造論のための覚書——」『連語論——鈴木泰教授古希記念論集』(仮題)

泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』研究社

奥村大志 (2006) 「時を表す機能語—「たとたん」「かと思うと」「やいなや」「～が～ないかのうちに」「が早いか」の意味・特徴の検討—」『実践女子短期大学紀要』27

グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

江雯薫 (2000) 「「～瞬間 (ニ)」、「～途端 (ニ)」、「～ヤ (否ヤ)」、「～ナリ」—その共通点と相違点について—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』9

田島優 (2001) 「〈ル形〉+途端」から「〈タ形〉+途端」へ」『説林』49

中里理子 (1998) 「時間的近接関係を示す接続表現について—「やいなや」「とたん」を中心に—」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』7

中村重穂 (2005) 「「～なり」と「～たとたん」に関する一考察—意味論的観点から—」『北海道大学留学生センター紀要』9

ハディウトモ ドゥイ アンゴロ (2012) 「時間的近接関係を表わす接続表現の研究—明治・大正期の「とたん」の形態と意義に—」『立教大学日本語研究』19

ハディウトモ ドゥイ アンゴロ (2013) 「近接関係の時間表現の研究—「とたん (に)」「やいなや」「はずみ (に/で)」「拍子に」を中心に—」『立教大学日本語研究』20

三次佑果 (2016a) 「時間的近接関係をあらわす接続機能語の分類——「とたん」「瞬間」「やいなや」——」『学習院大学大学院 日本語日本文学』12

三次佑果 (2016b) 「時間的近接関係を表す「なり」の用法」『学習院大学人文科学論集』25

村木新次郎 (2005) 「〈とき〉をあらわす従属接続詞—「途端 (に)」「拍子に」「やさき (に)」などを例として—」『同志社女子大学学術研究年報』56

【付記 1】本研究は、次の研究費による研究成果の一部である。関係各位に謝意を表す。

○2016 年度科学研究費助成事業・基盤研究 (C) 「現代語文法形式から同じ意味の古典語文法形式を引く『現古文法対照辞書』の作成」(課題番号 26370550、代表・鈴木泰専修大学教授、安部は研究分担者)

○学習院大学計算機センター 2016 年度特別研究プロジェクト「日本古典語 (平安和文資料) における複合接続機能辞の通時的研究」(代表・安部清哉)

【付記 2】本稿は次のような過程と分担によって作成されたものである。安部が調査方法と調査票を立案して調査を実行し安部が本論を書き、一方、三次は研究過程で用例と先行研究の情報を安部に提供し、安部が授業ほかで試みたアンケート調査の回答の集計・図表作成とを担当した。安部は、指導

大学院生である三次の修士論文指導の過程で、トタンの連語的諸表現形式ごとの意味的相違が気になった。しかし、先行研究にその答えが必ずしも十分には得られないだけでなく、三次の調査・考察でも(三次(2016a)(2016b)および修士論文)、用例による帰納的分析や通常の意味分析を試みても容易に回答が得られそうもなく、また、安部の内省にても判然とできなかった。そこで、方言研究・社会言語学的調査などで安部も行うことがある話者へのアンケート調査による比較方法を思いつき、例文を吟味して実施してみたものである。連名としたのであえて役割分担を明記しておく。アンケートに協力して下さった学生諸氏にこの場を借りて深謝申し上げる。

ENGLISH SUMMARY

**On syntactic stereotype judged from the sentence pattern of the similar collocation;
“verb past form -TA sono + totan + ni,”**

ABE Seiya, MITSUGI Yuka

The conventional study of the usage and the meaning of a word were often considered while comparing one form (for example, the noun “totan”) with other words (the noun “shun-kan”, “douji”, etc.) as a target for consideration. But it is necessary to consider the usage of a word by “the collocation unit” as the longer unit. And it is also necessary to focus more attention on the differences in “constructions” with its collocation unit.

The noun “totan” for “as soon as” is taken up as an example in this research. The meaning is compared by the syntactic difference with each collocation form. Actually, a word as “totan” takes the collocation form as “totan”, “totan - ni”, “sono-totan” and “sono-totan-ni”. In the sentence structure, these appear in some of the following patterns: “verb past form -TA + totan, ~”, “verb past form -TA + totan + ni, ~”, “~. sono + totan, ~”, “~. totan + ni”, “~. sono + totan + ni, ~”, etc..

Furthermore, I clarify that there are differences in meaning by the two pair comparison between five sentence structure patterns of these, through the language introspection investigation that I performed with a native speaker. In the language investigation, I compared it at a point of view of the difference in time width of the event before and after the “totan” collocation form. Conventionally, the differences in these five compound word forms has been unknown.

As a result of having compared two events, that is, before and after the “totan” form by observing from the view-point of the time distance, for the first time, I was able to clarify that the form on the left side is shorter and that on the right side is longer, as in the table below.

the time distance between two events				
shorter	<<<<	<<<	<<<	longer
“verb past form -TA + totan, ~”	“verb past form -TA + totan + ni, ~”	“~. sono + totan, ~”	“~. totan + ni”	“~. sono + totan + ni, ~”

Key Words: collocation unit, sentence structure, syntactic difference, “totan”, compound word form as “verb past form -TA sono + totan + ni, ~”